親王の夫と比肩するに足る程の氣力と神品とを有する點より觀て正成は餘程の學者であり、其の學問は後醍醐天皇と同じ系統のもので宋學であつた。天皇の御筆蹟には二つの流派があつた中の一つは護良親王、顯家等の派に屬する或る師匠のそれであらう。その師匠が又正成を訓育した碩儒であつたと推量すると云ひ、更に彼の學問に就て述べて早くより學問の關係を以て天皇と正成とは相策計應する所があつたかも知れぬと說き、其他彼の作戰畫等にも論及してある。それらの所說及び其他の諸篇、何れも明徹卓拔なる史眼を以て、史料の深奧に祕せられたる史實を探求研覈してあるのは從來の諸說の不備や誤謬を補正するものが多く、學界の爲め貢獻するところが尠少でない。蓋し南北朝史研究者の必讀すべき好著である。（菊版四九五頁、圖版五十餘、京都星野書店發行、價五・五〇）〔松野〕

◉大日本史料　第八編之十二　史料編纂掛編纂

昨年の暮、第五編之六（後堀河天皇寬喜二年の末から翌三年十月迄）を出した大日本史料は本年に入つて第八編之十二を發行した。本書に收むるところは後土御門天皇文明十二年正月から翌十三年正月（十八日）迄一箇年ばかりの史料である。此期間は應仁文明亂後の瘡痍が尙ほ癒えないで、御料所や領地の租入が上らぬ爲めに、公卿も女官も出仕し兼ねるものが多く、從つて節會が行はれなかつたが、幕府に於ても義政と富子夫妻、義政と義尙父子の間が圓滿を缺いで、義政は隱居するといひ、義尙は出家すると騷ぐ抔の現實暴露があり、地方にも越前の甲斐、朝倉の取合を始めとして、到る處に小競合の絕間がなかつたが、成氏は細川政元を通じて都鄙の和睦を圖つて居る。公卿では矢張國家の元老としての兼良、神典の權威としての兼倶が光つて居る。前者が將軍の諮詢に對して樵談治要を贈つたのも後者が日本紀の神祕御傳授の爲め特に從二位に叙せられたのも皆此期間の出來事であつた。武人で詩人を兼ねた持是院妙椿は歿したが、應仁文明の亂に餘りに利けものであつた爲めに一部の人士の憎惡から其死が祝福されてゐるのも、なか〳〵に憐れを覺える。同じ美濃の東常緣は上洛して關白や將軍に歌道

を傳へ、連歌の宗匠宗祇は大内政弘に招ぜられて山口に赴き筑紫道記を殘した。土民の一揆は此頃も頻々と起つて幕府の設けた京七口の關所をも撤去するに至つたが、十輪院内府記に月並の下剋上の代りに上輕下强の語を用ゐてゐるのも面白く、大乘院寺社雜事記に「悉皆下より天下を可成敗分候」といつてゐるのは餘りにヒステリックである。幕府に忍入つて寶刀を盜み出した盜人を捕へて見れば、意外にも忍びの名人といはれた賀茂の氏人二人であつたから、大路を渡して首を斬り三日の間河原に梟首した上に、其母と妻とを水刑に處してゐるのも時代粧の一つの現れである。幕府が島津氏に命じて亂中來聘を怠つた琉球の入貢を促したのは琉球の所屬を示すべき有力な史料と見られる。本卷に收められた爲めに現れた史料の主なるものに東山御文庫本の御湯殿上日記の完本や十輪院内府記等があり、關東の大震火災の犧牲となつた歴代殘闕日記の記錄も亦貴い名殘といはねばならぬ。又朝鮮に關したものには李氏實錄があり、これに據つて朝鮮と日本及び琉球との交通關係抔をも徵することが出來る。本卷に挿入の寫眞には二條政嗣自筆の消息がある。因に本書の希望者は發行所に申込めば定價金七圓を以て頒布を受けらるゝといふ。（菊版一、〇三三頁、東大史料編纂掛發行）〔三浦〕

◉往來物落穗集　石川謙編

文化の發達を研究する上に於いて教育方面の史的考察は最も必要なる事項である事は言ふまでもないが、それに要する資料の蒐集と精選とが未だ充分に行はれて居らぬから、この缺陷を補はんが爲めに著者は往來物全集を出版する計畫を有して居り、先づ往來物の教育史的意義を考察する上に最も必要なものゝ一部を選擇し、且つ其の目的を達するに便利の多い排列法により次第して著されたのが本書である。本書は全體を四編に分ち、第一編寺子屋史總觀を第一章寺子屋についての文獻、第二章文學に表はれたる寺子屋とし、第二編、訓育上の教科用書を第一章寺子教訓に關するもの、第二章一般教訓に關するものに分ち、第三編地理科に關する教科用書を第一章自遣型に屬するもの、第二章國盡型に屬するもの第三章